

「2023年度タイ・チュラロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部1年 渡邊 結菜

① 学習成果

以前は異なる国籍の人と交流することに急に怖気づいていたが、この派遣を通してタイの人々と多く関わり彼らのやさしさに触れたことで、怖気がなくなり、むしろ積極的に交流したいという気持ちが生まれた。今回は他の日本人学生も一緒だったのに加え、大学内では主に日本語を使用していたため、基本的に困ることはなかった。他言語圏への本格的な交換留学となると今回のようにスムーズにはいかないのかもしれないが、タイ語というほとんど言葉のわからない国でも二週間日常生活を送ることができたことは、自分にとってかなりの自信になった。英語などの既に多少習得している言語圏であれば、もっと楽に過ごせるかもしれないと思えるくらいだった。自分の中で全体的に留学へのハードルが下がり、留学への意欲が上がった。またチュラロンコーン大学での授業の多くが英語だったことから、英語で進行する授業への参加のハードルも下がり、帰国後は今まで避けていたE2科目を選択した。タイ滞在中は、チュラロンコーン大学の学生が色々とサポートをしてくれたが、それが本当にありがたかったことから、日本での留学生のサポートに関心がおこった。以前は考えもしないことだった。この派遣で他言語圏での生活や異文化交流に挑戦したことは、私の中のそれらへのハードルを引き下げ、さらなる挑戦への意欲をもたらし、その結果自分の中に新たな可能性が見えてきた。本当に貴重で意味のある派遣だったと感じる。

② 海外での経験

タイ語で屋台の店員さんと会話して注文した。Grabを初めて使った。タクシーの運転手とうまく会えるか不安だったが、どうにか会うことができて、自信になった。

③ プログラム内容

タイでの2週間の滞在、及びそこでのチュラロンコーン大学の学生との交流を通して異文化交流・異文化理解への関心を高めることを目標としたプログラム。

平日は9時から16時まで授業。英語でのタイ語の授業が半分ほどで、その他に、英語でのタイの仏教文化に関する講義、チュラロンコーン大学文学部日本語専攻の学生との共同発表、日本語での通常講義への授業参加などがあった。共同発表では、タイ人学生日本人学生混合で5グループに分かれ、「これだからタイに住みたい・日本に住みたい」というテーマのもと、グループごとに発表した。一週目の土曜日にはチュラロンコーン大学の先生方にガイドしてもらいながらアユタヤを散策した。平日の放課後や日曜日及び週に一回ある平日の午前休にはバンコク市内の興味ある場所を各々観光した。チュラロンコーン大学の学生がプランをたててくれた時もあった。

④ 進路への影響について

国内だけでなく、海外で働くことも考慮に入れたいと思うようになった。